

温度形容詞「あつい」「あたたかい」「ぬるい」の 意味分析*

－ 比喩による意味拡張を中心に －

李 亭 夏**

本稿は、日本語の温度形容詞「あつい」「あたたかい」「ぬるい」の実例を用いて、各々の複数の意味と意味拡張の様相を認知言語学の観点から分析する。分析の結果を基に意味拡張の様相を図式化することを目的とした。

「あつい」「あたたかい」「ぬるい」は、プロトタイプである「基本義」からメタファーとメトニミーの2種の比喩によりその意味が拡張する。

「あつい」と「あたたかい」は、各々プロトタイプである「基本義」から5つの「別義」へと意味が拡張する。さらに、「基本義」から下位カテゴリーへと意味拡張が進んでいくことにつれて具体物を対象にした意味から抽象的な意味に移り、類似性によるメタファーより隣接性や社会・文化的な経験による関連性に基づくメトニミーによってその意味が拡張している。

「あつい」と「あたたかい」は、意味が拡張する課程で触覚から聴覚、触覚から視覚への形容詞の特徴である共感覚的な転用が見られる。しかし、「ぬるい」は、プロトタイプである「基本義」から1つの「別義」へと意味は拡張するが、その意味拡張の課程で転用は見られない。

キーワード：認知言語学、意味拡張、あつい、あたたかい、ぬるい
(인지언어학, 의미 확장, 뜨겁다, 따뜻하다, 미지근하다)

1. 序論

日本語の感覚形容詞の中、温度感覚を表わす温度形容詞は大きく温感覚系と冷感覚系に分けることができる。これらの温感覚系と冷感覚

* 이 논문은 2019년 대한민국 교육부와 한국연구재단의 지원을 받아 수행된 연구임 (NRF-2019S1A5B5A07110418)

**釜山대학교 日本研究所 土台研究チーム 研究員、jungha05@hanmail.net

系とも具体物の温度を表す表現以外に心理的な描写や社会・文化的要因により転用が起こり、意味が拡張する。この意味拡張の過程で多義語の特徴を見せる。多義語とは、ある一つの語が有する最も基本的な意味から何らかの原因でその意味が拡張し、複数の意味を持つようになった語である。多義語の複数の意味は互いに相関関係を有する。

本稿では、日本の温度感覚の形容詞、その中でも温感覚を表す表現である「あつい」「あたたかい」「ぬるい」を対象とし、認知言語学の比喩の観点から分析を行う。用例は、国立国語研究所とLago言語研究所が協同開発したNINJAL-LWP for BCCWJ(<http://nlb.ninjal.ac.jp>)を用いてできるだけ多くの例文を閲覧して収集した。また、コーパスを補充する必要がある用例は2000年以後、日本で出版された小説から収集した。集めた用例を対象とし、認知言語学の比喩の観点からそれぞれの意味を分析し、意味領域の分類を行い、その結果を基に図式化する。図式化を通して日本語を母語としない日本語学習者がより明確に温度形容詞の意味が拡張していく様相と相関関係について理解しやすくなると思われる。

2. 本論

2.1 先行研究

温度形容詞「あつい」「あたたかい」「ぬるい」の実際の用例を用いて意味拡張の過程に対する認知言語学的な観点から行った先行研究は現在見当たらない。日本語の温度形容詞としての先行研究には、国広(1967)、山口(1982)、久島(1997)などがある。

国広(1967:19-20)は、温度形容詞「あつい」「あたたかい」「ぬるい」の意義素を以下のように説明している。

アツイ(暑)≪体温が常温かそれ以上の時不快な程度にまで多量の熱が加えられる時の体全部の感覚≫

アツイ(熱)《体の一部に多量の熱が加えられるが体全部には及ばない時の感覚》

アタタカイ (1)体全部《体温が常温で熱が加えられもうばわれもしない時、また常温以下の時は快い程度に熱が加えられる時の体全部の感覚》

(2)体一部《該当の体一部が常温以下である時わずかな程度の熱が伝えられる時の感覚》

ヌルイ 《該当の体一部に熱が加えられもそこからうばわれもしない時の感覚》

つまり、温度形容詞をある状況下での「体全部」か「体の一部」の感覚としてとらえている。

また、国広(1982:46)では、「われわれの身体感覚も相対的なものであり～(中略)～人間の温度感覚は体内の体温基準に応じて相対的に変わるものである」とも述べて温度感覚が人間の身体感覚を基準としていることにも触れている。

久島(1997)では、国広(1967)が述べている「体全部」と「体の一部」の感覚という概念を「統一的感覚」と「非統一的感覚」という言葉で再定義し、そこに《物》と《場所》の温度の対立という概念を加えて温度形容詞を説明している。しかし、国広も久島も全般的に簡単な作例を用いて概念を説明していて、実例を用いた意味分析と基本的な意味から拡張意味への拡張様相についての分析は行っていない。

山口(1982:202-215)では、感覚・感情語彙を通時的に考察する課程で、快いと認められる場合と、不快と認められる場合、快い・不快のいずれともきめられない場合の三つの基準にそって分類し、「あつい」を不快感覚の枠に、「あたたかい」を快い感覚の枠に分けて述べている。これらの感覚語彙は上代から現代に至るまで「寒い」「涼しい」「冷たい」の語だけを除外したいずれも成立した時の意味をそのまま保有していると述べるに止まり、各温度形容詞に対する意味分析と意味拡張についての研究は行っていない。

2.2 分析の背景と方法

辻・菅井(2003:139-141)では、比喩は、「本来の語義(文字通りの意味)とは異なる意味で用いられること」を転義といい、転義をとまなうことこそが比喩であることを保証する条件になると述べている。また、認知言語学が援用する比喩の種類は隠喩、換喩、提喩の3つに絞られると述べ、隠喩(メタファー・metaphor)は類似関係、換喩(メトニミー・metonymy)は隣接関係、提喩(シネクドキー・synecdoche)は包含関係に整理できると説明している。辻(2002:210)では、多義を構成する要因に関して、「瀬戸(1997a)は、隠喩、換喩、提喩の3種を多義を構成する最も重要なパターンだとしている」と述べている。

本稿では、以上の研究を踏まえ、温度感覚を表す形容詞である「あつい」「あたたかい」「ぬるい」の複数の意味を比喩の観点からメタファーとメトニミーとシネクドキーの3つに分けてみることにする。メタファー、メトニミー、シネクドキーの定義は次の初山(2002:65, 69, 76)に従う。

- ・メタファー：二つの事物・概念の何らかの類似性に基づいて、一方の事物・概念を表わす形式を用いて、他方の事物・概念を表わすという比喩。
- ・シネクドキー：より一般的な意味を持つ形式を用いて、より特殊な意味を表す、あるいは逆に、より特殊な意味を持つ形式を用いて、より一般的な意味を表すという比喩。
- ・メトニミー：二つの事物の外界における隣接性、さらに広く二つの事物・概念の思考内・概念上の関連性にもとづいて、一方の事物・概念を表す形式を用いて、他方の事物・概念を表すという比喩。

また、比喩変化について辻・菅井(2003:139-141)は、「一定の秩序が認められる。その一定の秩序とは、比喩における転義や拡張の方向が一方向的に進む性質であり、単方向性(unidirectionality)という。こ

の隠喩的写像における単方向性は、Claudi and Heine(1986)や Heine et al.(1991)によって、より包括的形で一般化され、以下のような階層(序列)が提示された」と述べている。

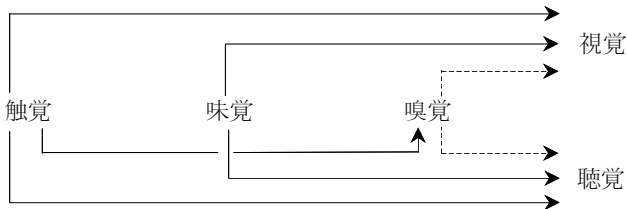
〔人間 → 物体 → 過程 → 空間 → 時間 → 性質〕

本稿でも上の階層に踏まえて、形容詞の特徴と合わせて[具体物の属性(温度)→具体物の状態→心理的状态]という段階的分析を行う。

また、野村(2004:53)は、形容詞が有する共感覚的な特徴による転用について「Williamasは図1に表される転用の方向性について、感覚様相の系統発生的、個体発生的な順序を表している」と述べている。しかし、野村が引用しているWilliamasの定式化は英語を対象にしたもので、本稿では、山梨(2007:60)がWilliamasの方向性仮説を土台に日本語に合わせた触覚から嗅覚へ、嗅覚から視覚へ、嗅覚から聴覚への方向性の経路を追加した定式化(図2)にならって分析を行う。



<図 1> 野村(2004:53):Williamasの共感覚の定式化



<図 2> 山梨(2007:60)の日本語の共感覚比喩の方向性

3. 意味分析

本章では、温度形容詞の「あつい」「あたたかい」「ぬるい」の基本的な意味分析から一步進み、対象語が有する多義的性格に焦点を置き、複数の意味を分析し、それを基にそれぞれの転用による意味拡張を考察する。

コーパスから用例を収集するとき、インターネット辞書類は収集対象から排除した。コーパスと小説の出版物から収集した用例にはその出典を付けておいた。一般小説の出版物はあくまでもコーパスを補うために用いた。

対象語「あつい」「あたたかい」「ぬるい」のそれぞれの意味の中、最も基本的な意味を「基本義」として設定した。プロトタイプ(prototype)に該当する「基本義」から比喩により拡張された意味を「別義」に設定し、順次に番号を付与した。

3.1 「あつい」の意味拡張の様相

「あつい」は「熱い」と「暑い」の二通りに表記される。二つの中、具体物の温度属性を意味する「熱い」がプロトタイプ(prototype)であるので、「基本義」に設定した。

「基本義」<具体物の温度がある限度を超えて高いさま>

- (1) また、熱い炎で焼かれて筋肉が萎縮し、最初とはまったく別の形が生み出される様子を抽象的に描くことで、今まで目にしたことがないような形を描き出しています。

(市政広報ふくい、2008)

- (2) 女の子が熱いお茶を淹れてくれる。私は釣爪で茶碗を持ち、お茶をすすする。

(川上弘美『竜宮』2002)

- (3) やがて水は沸騰し、勢いよく熱い湯気が出てきます。

(後藤道夫『子どもにウケる科学手品77』1998)

例(1)の「熱い炎」の「あつい」は、具体物を焼くか燃やしてしまうぐらいの物凄く高い温度の感覚で、到底近づけない程度の火そのものが有する強烈な刺激を意味する。例(2)の「熱いお茶」の「あつい」は、沸騰したお湯で入れたお茶の高い温度の感覚で、人の手や唇や舌などに直接的とか間接的に触れることで感じる刺激を意味する。例(3)の「熱い湯気」の「あつい」は、水が沸騰するとき発生する高い温度の気体に接近して触れるとき感じる刺激を意味する。以上のように炎、お茶、湯気などのような物質が有するある限度を超える高い温度から感じる刺激で、直接触れる場合はともかく、直接触れなくても教育や経験などによって対象が危険であるぐらい高い温度であることがわかる。最も基本的な意味で「あつい」を用いている。

「別義1」<具体物の温度がある限度を超えて高い><人間の体温が平温¹⁾より高いさま>

「基本義」からの類似性に基づくメタファーによる意味拡張である。

(4) まだ鼻水が治らないから仕方がないな～と思っていたがどんどん体が熱くなり、六時半…38.4。

(Yahoo! ブログ、2008)

(5) 両手には点滴。身体が熱くて、汗びっしょりになっていた。人工呼吸器は初めてだったので、動転した。

(植松文江『十四年十回のがん手術を生き抜いて』2004)

例(4)の「熱くなり」と例(5)の「身体が熱くて、汗びっしょり」の「あつい」は病気か何らかの原因で平温である36.6–37.5度の範囲を越えて体温が高く上昇した体に触れる時の感覚である。人間の非常に高い体温が与える感覚が、高い温度の物質が与える感覚に似ていることから「基本義」からの類似性に基づくメタファーにより意味が拡張している。

1) 保健師からのちょっといいはなし http://www.town.minano.saitama.jp/wp-content/uploads/2016/08/2016_08_P12.pdf (閲覧日:2022.03.30)

「別義1-1」<人間の体温が平温より高いさま><泣く>
「別義1」からの時間的(同時性)な隣接性に基づくメトニミーによる意味拡張である。

(6) 目頭が熱くなるのを覚えて、彼は目をぬぐおうとした。だが、腕が満足に動かない。

(早川書房編集部『星界の戦旗読本』2001)

(7) それが田城との最後の食事であり、最後の場面となってしまった…。その日の田城の顔が遺影と重なり、目頭が熱くなった。遺影がゆれはじめた。

(大下英治『修羅の群れ』1984)

例(6)と例(7)の「あつい」は、「目頭が熱くなる」という形の句単位で見る必要がある。人間は感動や悲しみなどの心理的刺激を受けた場合、人によって差はあるが涙が出るのが一般的である。涙腺から体内の温度に合わされた液体が体外に出る現象が「泣く」ことである。涙腺に涙がたまるその瞬間が「目頭が熱くなる」瞬間で、それとほぼ同時に目から涙が流れる。従って、「あつい」は外部の温度に合わされた涙腺辺りの皮膚に体内から出た液体(涙)の温度が伝わる感覚である。「別義1」からの時間的(同時性)隣接性に基づくメトニミーに依り意味が拡張している。

「別義2」<温度がある限度を超えて高い><全身で感じる空気の温度が高いさま>

「基本義」からの類似性に基づくメタファーによる意味拡張である。

(8) 尾山台の家では7月6日から8月14日まで40日間連続して真夏日が続き、熱帯夜も7月17日から7月26日まで10日間連続した。本当に暑い夏であったが、その間のデータを見てみよう。

(田中慶明、若林礼子『本質を暮らす贅沢な家』2005)

(9) 夏は暑いしベトベトしてて不快。

(週刊SPA! 2003)

- (10) 矢代は郡山駅で買った時刻表を持って、近くの喫茶店に入った。外が寒いので、店の中は暑く感じられた。
(西村京太郎『みちのく殺意の旅』1989)

「暑い」と表記する「あつい」は、全身で高い温度の空気に接する時に感じる感覚である。「暑い」という感覚は皮膚表面だけでなく体の内部まで伝わる。例(8)の「本当に暑い夏であった」の「あつい」は昼間に上昇した空気の温度が夜まで冷めない熱帯夜が十日間も連続するほど苦しかった感覚を表している。例(9)の「夏は暑いし」の「あつい」は、夏場の気温に対する典型的な感覚で、例文の中でも確認できるように不快感を与える感覚である。例(10)の「外が寒いので、店の中は暑く感じられた」の「あつい」は、寒いところから暖房がよくきいてある喫茶店に入ったとき、外に比べて相対的に高い温度の空気に接触した感覚を表している。夏場のように自然的に高くなった空気だけではなく、人工的に高くした温度の空気も「あつい」を用いて表す。例(8)、(9)、(10)いずれも、常に私たちを取り囲んでいる空気の温度が高くなって与える刺激が湯気のような具体物の温度がある限度を越えて高い状態が与える感覚に似ていることから、「基本義」からの類似性にもとづくメタファーに依り意味が拡張している。

「別義3」<温度がある限度を超えて高い><人間の熱意や情熱が高まるさま>

「基本義」からの類似性に基づくメタファーによる意味拡張である。

- (11) 「あそこは井川に託した」星野監督の言葉から、井川に賭ける熱い思いが伝わった。

(Sports Graphic Number、2002)

- (12) 国のために何ができるのかと熱い議論を戦わせたものでした。

(経済界、2005)

- (13) でも、あのときの頑張りはずごかった。私も思わず熱くなったのを憶えてる。

(武蔵国際総合学園『不登校と向き合う』2001)

例(11)の「熱い思い」の「あつい」は星野監督が井川に賭ける期待の言葉から感じられる強い熱意が「高い温度の具体物による感覚」と類似しているように心理的に感じることから「基本義」からの類似性に基づくメタファーに依り意味が拡張している。触覚から聴覚へと意味が転用している。例(12)の「熱い議論」の「あつい」は、国のために議論を戦わせる人々の姿から「高い温度の具体物による感覚」と類似している熱意が感じられると心理的に思うことから「基本義」からの類似性に基づくメタファーに依り意味が拡張している。触覚から視覚へと意味が転用している。例(13)の「思わず熱くなった」の「あつい」は、頑張った時の記憶が蘇った話者の感情が高まり、情熱が沸き立つような感覚であることを意味する。「具体物の温度が高い感覚」特に液体が沸き立つ感覚に似ていることから「基本義」からの類似性に基づくメタファーに依り意味が拡張している。

「別義3-1」<人間の熱意や情熱が高まる><お互いに愛情が高まって激しく好き合うさま>

「別義3」からの関連性(因果関係)に基づくメトニミーによる意味拡張である。

(14) 熱い心で恋をしたり、仕事をしたりしなくては、人生はつまらない。

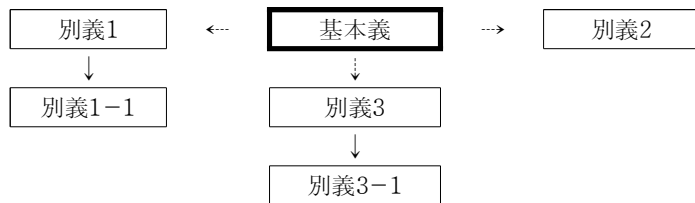
(斎藤茂太郎『「なぜか人に思われる人」の共通点』2005)

(15) 五歳も年下の男と熱い仲になっているじゃないか。

(和久峻三『死闘』1998)

例(14)の「熱い心で恋をしたり」の「あつい」は、相手に対するお互いの愛情が強く燃え上がるように高ぶっていると心理的に感じる感覚である。例(15)の「熱い仲」の「あつい」は、恋愛感情が高まり、お互いに対して燃え上がるようなさまを表している。好感を持っている相手に対して「熱意や情熱が高まる」ことに従って「お互いに愛情が高まって激しく好き合う」関係に変わっていくので、「別義3」からの因果関係に基づくメトニミーに依り意味が拡張している。

以上、「あつい」の意味分析の結果を基に意味拡張の様相を図式化すると以下ようになる。



<図 3> 「あつい」の意味拡張の様相(metaphor ⇄、metonymy →)

3.2 「あたたかい」の意味拡張の様相

「あたたかい」は「温かい」と「暖かい」の二通りに表記されている。この中、具体物の温度属性を表す「温かい」がプロトタイプ(prototype)であるので、「基本義」に設定した。

「基本義」<具体物の温度が適当に高いさま>

(16) 温かいお茶とハムを挟んだパンを盆にのせて持ってきたという。

(榎木洋子『緑のアルダ』2003)

(17) 舞の手を力強くにぎりしめるあたたかい手。

(楠末莉『ミニモニ。にあまかせっ!』2002)

(18) まだ温かい、糞と羽毛のちよっぴりついた生みたての卵。

(西:76)

例(16)の「温かいお茶」の「あたたかい」は、お茶の温度が熱すぎもせず冷たくもない適当に高い状態であり、ちょうどよいさまを意味する。例(17)の「あたたかい手」の「あたたかい」は、具体物の温度が適当に高い、つまり体温が適当に高い平温状態であることを意味する。例(18)の「まだ温かい」の「あたたかい」は、生みたての卵が保っている適当に高い温度を意味する。例(16)、(17)、(18)のいずれも「具体物の温

度が適当に高いさま」という最も基本的な意味で「あたたかい」を用いている。

「別義1」<温度が適当に高い><全身で感じる空気の温度が適当に高いさま>

「基本義」からの類似性に基づくメタファーによる意味拡張である。

(19) 低気圧では空気が暖かく軽いので上昇気流が、高気圧では空気が冷たく重いので下降気流となる。

(新編理科総合B、2006)

(20) だから季節が暖かい間は、朝、小川の岸に出て顔を洗う者も珍しくはない。

(国語3、2005)

(21) 「きょうは冷えるね。昼はあんなに暖かかったのに」

(藤原伊織『雪が降る』2001)

例(19)の「空気が暖かく軽いので」の「あたたかい」は、人間が全身で感じる空気の状態が適当に高い温度であることを意味する。例(20)の「季節が暖かい間」の「あたたかい」は、季節ごとに変わる空気の温度の中で、空気の温度が適当に高い時期に私たち人間が感じる感覚を意味する。例(21)の「昼はあんなに暖かかったのに」の「あたたかい」は、現在の冷える空気の温度に比べて、昼間の空気の温度が適当に高かったことを意味する。例(19)(20)(21)の「あたたかい」は、いずれも「基本義」からの類似性に基づくメタファーにより意味が拡張している。

「別義1-1」<全身で感じる空気の温度が適当に高いさま><温度が適当に保たれる感じ>

「別義1」からの因果関係(身体的経験)に基づくメトニミーによる意味拡張である。

(22) 彼らが子供用の暖かそうなコートを持っていたので、それを取り上げて、私は着た。

(沙藤一樹『プルトニウムと半月』2000)

(23) タータンチェックの暖かそうなプリーツスカートに編み上げブーツ。

(小池真理子『無伴奏』2005)

例(22)の「子供用の暖かそうなコート」と例(23)の「タータンチェックの暖かそうなプリーツスカート」の「あたたかい」はコートやスカート自体が「温度が適当に高い」という温度属性を有するわけではないが、コートやスカートなどを着ることによって体温がた保たれるような感じがすることを意味する。いずれも身体的経験を根拠にした比喻である。例(22)、(23)いずれも空気が与える適当に高い温度の感覚と似ているような感覚を毛皮や毛織物などを素材にした衣類などで体を包むことで感じることを表している。「別義1」からの身体的経験を根拠にした因果関係に基づくメトニミーに依り意味が拡張している。

(24) 暖色 暖かいイメージを与える色である。

(Create information 新版情報A、2006)

(25) リンクの記事はクリスマスイルミネーションではないが色調が暖かい感じのLEDだ。

(Yahoo! ブログ、2008)

例(24)と(25)の「あたたかい」も、経験を根拠にした比喻である。直接であれ間接的であれ炎の温度を経験した人間の認知システムで炎を連想させる赤系に似ている色調を(たとえば、赤、オレンジ、黄色系の色調)を見ると炎が与える熱感を蘇るようになる。これによって暖色系の色が視覚的、心理的に温度を保ってくれるように感じる。この経験基盤を根拠に色感を表現することに「あたたかい」を用いている。温度という触覚から色感という視覚への転用が起る。「別義1」からの身体的経験に基づくトニミーに依り意味が拡張している。

「別義1-1-1」<温度が適当に保たれる感じ><金銭状況が適当に保たれる>

「別義1-1」からの関連性(文化・身体的経験)に基づくメトニミーによる意味拡張である。

- (26) また減税が行われ国民の懐が暖かくなると、それに応じて国民が消費を増やすであろう。こうして需要が増え景気が良くなっていく。

(水谷研治 『「縮小均衡」革命』1995)

- (27) 奥さんはきのう、お金が入って懐が暖かいのだなあ。

(矢野晶子 『カルメンお美』1988)

例(26)、(27)の「あたたかい」は、「金銭状況が適当に保たれる」という意味の慣用語である「懐があたたかい」の形でよく用いられ、経済的に余裕があることを心理的な温度で感じる表現である。文化・身体的な経験から用例を見てみると、いずれも金銭の状況がよくなり、心理的な温度まで適当に高くなって維持されるという意味に拡張している。

昔日本人は「懐」にお金を所持するのが一般的で、所持している金額が多ければその厚さによって「懐」が物理的にあたたかくなると同時に、それによって心の温度まであたたかくなる文化的な経験を基盤にした表現である。反対の表現に「懐が寒い」があって、経済的に余裕がないことを表す。このような文化・身体的な経験を踏まえて用例を見てみると、例(26)の「国民の懐が暖かくなる」の「あたたかい」は、国の減税政策のおかげで国民の経済状況に余裕ができて心理的にまでその余裕を感じるという意味である。例(27)の「お金が入って懐が暖かい」の「あたたかい」は、収入ができたことで金銭的に余裕が維持されることによって心理的な温度まで適当に維持されるという意味である。「別義1-1」からの関連性(文化・身体的経験)に基づくメトニミーにより意味が拡張している。

「別義2」<温度が適当に高いさま><優しい><思いやりのあるさま>
「基本義」からの類似性に基づくメタファーに依る意味拡張である。

- (28) ひとみも娘たちも全く異質な環境に暮らすことになってびくびくしていたから、温かいもてなしはとてもありがたかった。

(チャールズ・R.ジェンキンス、伊藤真訳 『告白』2005)

(29) 心豊かな温かい人間に私もならなければならないし、子供についてのすべての責任は私にあるのです。

(黒柳朝『チョッちゃんが行くわよ』1982)

(30) みんなの温かい声に迎えられながら、玄関に入ったすぐの座敷に運びこんでもらう。

(清水久美子『夢がかなう日』2002)

(31) もう一つの商品特性は山本、板橋両氏の「人に対して向ける優しい心と温かい目差し」である。

(山本靖雄・板橋征二『イラストでわかる35歳・45歳・55歳のためのゼットタイ転職できる本』2001)

例(28)の「温かいもてなし」の「あたたかい」は、ひとみと娘たちに対する人たちのもてなしから感じる優しさや思いやりを表している。「具体物の温度が適当に高いさま」が与える感覚と人間の優しくて思いやりのある態度が与える感覚が類似していると心理的に感じることで、「基本義」からの類似性に基づくメタファーにより意味が拡張している。例(29)の「心豊かな温かい人間」の「あたたかい」は、心理的に感じる人間の属性を表している。これは「具体物の温度が適当に高いさま」の優しい感覚と人間の属性から感じられる優しさや思いやりのあるさまが類似していると心理的に感じることで「基本義」からの類似性に基づくメタファーに依り意味が拡張している。例(30)の「みんなの温かい声」の「あたたかい」は、話者を迎えるみんなの声から感じられる優しさや思いやりを表している。これはみんなの声が、「具体物の温度が適当に高いさま」から感じられる優しさに似ていると心理的に感じることで「基本義」からの類似性に基づくメタファーに依り意味が拡張している。意味が拡張する課程で触覚から聴覚への転用が起る。例(31)の「温かい目差し」の「あたたかい」は、人に対する山本と板橋の視線が醸し出す優しくて思いやりのある感じを表している。その視線の感じが「具体物の温度が適当に高いさま」に似ていると感じることで「基本義」からの類似性に基づくメタファーに依り意味が拡張している。意味が拡張する課程で触覚から視覚への転用が起る。

「別義2-1」<温度が適当に高いさま><優しい><思いやりのある><環境>

「別義2」からの関連性(因果関係)に基づくメトニミーによる意味拡張である。

(32) 何よりも明るい教室環境、温かいふんい気の学級文化が望まれます。

(切明悟『探検・子どもの勉強の世界』2001)

(33) 私たちは個々が様々な「ちがひ」をごく自然に受け入れられるあたたかい社会をつくっていくことが大切です。

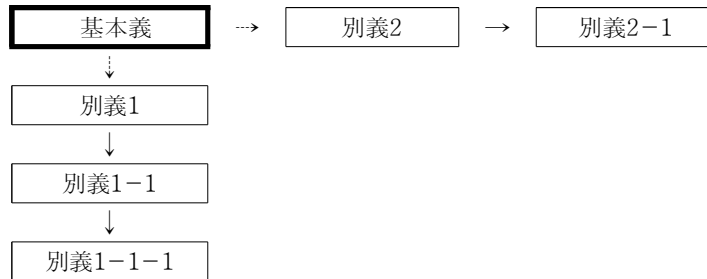
(市報べっふ、2008)

(34) 家族で地域の行事に参加した様子や明るく温かい家庭生活などを描いてください。

(広報たじみすとTajimist、2008)

例(32)の「温かいふんい気の学級文化」の「あたたかい」は、学級の雰囲気_が優しくて思いやりのあるという意味で、温度が適当に高いさまから感じられる優しさや思いやりを思い浮かばせる環境のことを意味する。例(33)の「あたたかい社会」の「あたたかい」は、人々に様々な差があることを当たり前のように思い、自然に受け入れられる優しさや思いやりがある環境のことを意味する。例(34)の「温かい家庭生活」の「あたたかい」は、家族がお互いに対して優しくて思いやりのある家庭のありさまを意味する。「別義2」の人間そのものが醸し出す優しくて思いやりのある態度により、例(32)の学級、(33)社会、(34)家庭の環境が優しくて思いやりのある雰囲気になることから「別義2」からの関連性(因果関係)に基づくメトニミーにより意味が拡張している。

以上、「あたたかい」の意味分析の結果を基に意味拡張の様相を図式化すると以下のようになる。



<図 4> 「あたたかい」の意味拡張の様相 (metaphor → metonymy →)

3.3 「ぬるい」の意味拡張の様相

「基本義」<具体物の温度が本来の期待に十分及ばないさま>

- (35) あぐりはぬるいお茶を捨て、熱い茶を淹れ直した。
 (田辺聖子『ジョゼと虎と魚たち』1987)
- (36) 彼は胃をなだめてくれることを期待して、茶をもう一杯注いだ。湯がぬるくて効果がなかった。
 (ジョー・シャーロン；田中昌太郎訳『上海の紅い死』2001)
- (37) カイロがぬるくなることに、昼食の時間となる。
 (川上弘美『竜宮』2002)

多数の例文を収集、分析した結果、主にお茶の湯、風呂のお湯、飲み物、酒などのような液体の温度に「ぬるい」が用いられた用例が多かった。また、温感と冷感、両方で本来期待される温度が十分維持されていない状態という意味で「ぬるい」が用いられている。例(35)の「ぬるいお茶を捨て」の「ぬるい」は、「お茶」の温度がさめてしまい、本来の期待に及ばないことを意味する。例(36)の「湯がぬるくて効果がなかった」の「ぬるい」は、胃をなだめるためにお茶を飲んだのに、湯の温度が十分温かくない状態であることを意味する。例(37)の「カイロがぬるくなるころ」の「ぬるい」は、「カイロ」の本来の機能であるあたたかさが時間の経過につれて少しずつさめた結果、本来の期待に十分及ばなくなることを意味する。例(35)、(36)、(37)のいずれも対象

物の温度が本来の期待に十分及ばないない状態というもっとも基本的な意味で「ぬるい」を用いられている。マイナス的なイメージを有する。

(38) 38℃前後のぬるい湯は、副交感神経の作用を活性化させる作用があるので、心身の興奮を鎮めてリラックスさせる効果がある。

(ヘルスケア研究会編『たった「疲れ」が驚くほどとれる本』2003)

しかし、例(38)の「38℃前後のぬるい湯」の「ぬるい」のように、本来温泉の湯に期待する40℃以上の熱さに十分及ばない38℃前後の温泉の湯に対する感じを表わすことに用いられてはいるが、例(35)、(36)、(37)と違い、マイナス的なイメージは持たない場合もある。

「別義1」<本来の期待に十分及ばない><態勢>

「基本義」からの類似性に基づくメタファーによる意味拡張である。

(39) 「この経営、ぬるいのではないかな」という予想を立てた。

(阪本啓一『リーダーこれだけ心得帖』2004)

(40) 何が何でも調べますといった、四角四面のきっちりとした様子ではなく、どことなくぬるいところが好感が持てる。

(群ようこ『浮世道場』2003)

(41) 黒1と下辺の大場にいったのはぬるい。

(春山勇『布石のベスポジ』2002)

例(39)の「この経営、ぬるいのではないかな」の「ぬるい」は、経営者の経営の態勢が本来期待される対応や姿勢に十分及ばない状態、つまり、厳しさがたりていないことを意味する。例(40)の「どことなくぬるいところ」の「ぬるい」は、人の対応に積極性が足りていないことを表わす。話者が積極過ぎる人の対応に息詰まる思いをしたことの影響で積極さの不足が余裕として認知している感覚である。人の行動や対応に「ぬるい」を用いる場合一般的に「熱情や積極性が足りない」とい

う意味要素を有するが、例(40)の「ぬるい」のように余裕として捉えられる場合もある。例(41)の「大場にいったのはぬるい」の「ぬるい」は、囲碁の解説でよく引用される表現で囲碁を並べる時の態勢、つまり、本来期待される攻めの的確性が十分ではないことを意味する。例(39)、(40)、(41)とも「基本義」からの類似性に基づくメタファーにより意味が拡張している。

以上、「ぬるい」の意味分析の結果を基に意味拡張の様相を図式化すると以下のようになる。



<図 5> 「ぬるい」の意味拡張の様相(metaphor → metonymy →)

3.4 「あつい」「あたたかい」「ぬるい」の意味拡張の様相

「あつい」「あたたかい」「ぬるい」の意味分析を基に各々のプロトタイプである基本義から、「あつい」と「あたたかい」は5つ、「ぬるい」は1つの「別義」を設定し、その意味拡張の様相を分析した。その結果をまとめると<表1>のようになる。

<表1> 「あつい」「あたたかい」「ぬるい」の意味拡張の様相

	あつい	あたたかい	ぬるい
基本義	具体物の温度がある限度を超えて高いさま	具体物の温度が適当に高いさま	具体物の温度が本来の期待に十分及ばないさま
別義1	人間の体温が平温より高いさま	全身で感じる空気の温度が適当に高いさま	態勢
別義1-1	泣く	温度が適当に保たれる感じ (触覚 → 視覚)	—
別義1-1-1	—	金銭状態が適当に保たれる	—

別義2	全身で感じる空気の温度が高いさま	優しい・思いやりのあるさま (触覚 → 聴覚) (触覚 → 視覚)	—
別義2-1	—	環境	—
別義3	人間の熱意や情熱が高まるさま (触覚 → 聴覚) (触覚 → 視覚)	—	—
別義3-1	お互いに愛情が高まって激しく好き合うさま	—	—

※()の中は、共感覚による転用を表わす。

4. 結論

本稿は、日本語の温度形容詞「あつい」「あたたかい」「ぬるい」の実例を用いて複数の意味を分析し、さらに意味拡張の様相を認知言語学の観点から分析して図式化することを目的とした。その結果、「あつい」「あたたかい」「ぬるい」は、プロトタイプからメタファーとメトニミーの2種の比喻により意味が拡張することが分かった。

「あつい」は、プロトタイプである「基本義」<具体物の温度がある限度を超えて高いさま>から「別義3-1」まで、5つの別義を立てた。図3から分かるように「別義1」<具体物の温度がある限度を超えて高い><人間の体温が平温より高いさま>、「別義2」<具体物の温度がある限度を超えて高い><全身で感じる空気の温度が高いさま>、「別義3」<温度がある限度を超えて高い><人間の熱意や情熱が高まるさま>は、プロトタイプである「基本義」からメタファーによって意味が拡張し、「別義1-1」<人間の体温が平温より高いさま><泣く>は「別義1」から、「別義3-1」<人間の熱意や情熱が高まる><お互いに愛情が高まって激しく好き合うさま>は「別義3」から、メトニミーによって意味が拡張すること

が分かった。

「あたたかい」は、プロトタイプである「基本義」<具体物の温度が適当に高いさま>から「別義2-1」まで、5つの別義を立てた。図4から分かるように「別義1」<温度が適当に高い><全身で感じる空気の温度が適当に高いさま>、「別義2」<温度が適当に高いさま><優しい><思いやりのあるさま>は、プロトタイプである「基本義」からメタファーによって意味が拡張し、「別義1-1」<全身で感じる空気の温度が適当に高いさま><温度が適当に保たれる感じ>は「別義1」から、「別義1-1-1」<温度が適当に保たれる感じ><金銭状況が適当に保たれる>は「別義1-1」から、「別義2-1」<温度が適当に高いさま><優しい><思いやりのある><環境>は「別義2」からメトニミーによって意味が拡張することが分かった。

「ぬるい」は、プロトタイプである「基本義」<具体物の温度が本来の期待に十分及ばないさま>から「別義1」まで、1つの別義を立てた。図5から分かるように「別義1」<本来の期待に十分及ばない><態勢>はプロトタイプである「基本義」からメタファーによって意味が拡張することが分かった。

以上の結果から、温度形容詞「あつい」「あたたかい」は、プロトタイプである「基本義」から下位カテゴリーへと意味拡張が進んでいくにつれて類似性によるメタファーより隣接性、社会・文化的経験による関連性に基づくメトニミーによってその意味が拡張していることが分かった。さらに、形容詞が有する共感的な特徴である転用も「あつい」と「あたたかい」の意味拡張の課程で、触覚から聴覚へ、また触覚から視覚へと起ることが見られた。

例文出典

『NINJAL-LWP for BCCWJ』 <http://nlb.ninjal.ac.jp>(閲覧日：2021.02.13)
梨木香歩(2001)『西の魔女が死んだ』新潮文庫(西)

参考文献

- 久島茂(1997)「温度を表す形容詞の意味体系:《物》と《場所》の対立」『日本語科学』
2、国立国語研究所、pp.62-80.
- 国広哲弥(1967)『構造的意味論』三省堂、pp.19-20.
- (1982)『意味論の方法』大修館書店、p.46.
- 辻幸夫(2002)『認知意味論のキーワード事典』研究社、p.210.
- 辻幸夫・菅井三実(2003)『認知言語学への招待』大修館書店、pp.139-141.
- 野村益寛(2004)『認知言語学 キーワード事典』研究社、p.53.
- 初山(2002)『認知意味論のしくみ』研究社、p.65、p.69、p.76.
- 山口仲美(1982)「感覚・感情語彙の歴史」『講座日本語学4:語彙史』明治書院、pp.202-
215.
- 山梨正明(2007)『比喩と理解』東京大学出版会、p60.
- 保健師からのちょっといいはなし
http://www.town.minano.saitama.jp/wp-content/uploads/2016/08/2016_08_P12.pdf
(閲覧日:2022.03.30)

<Abstract>

Semantic Analysis of the Temperature-denoting
Adjectives “Atsui”, “Atatakai”, and “Nurui”

– Focusing on Meaning Extensions Based on Metaphor –

Lee, Jung-Ha

This paper analyzes each of several meanings and aspects of meaning extensions of “atsui”, “atatakai” and “nurui” from the perspective of cognitive linguistics using naturally-occurring examples. Our goal is to schematize the aspects of meaning extensions based on the result of our analysis.

“Atsui”, “atatakai” and “nurui” extend their meaning from “basic meaning”, the prototype meaning of each word, in terms of two types of figurative language: metaphor and metonymy.

“Atsui” and “atatakai” extend their meaning from “basic meaning”, the prototype meaning of each word, to five “extended meanings”. Furthermore, as the meaning extension goes on from “basic meaning” to its subcategories, their meaning moves from concrete meaning to abstract meaning, and the meaning would extend by metonymy based on contiguity and relevance concerning socio-cultural experiences rather than metaphor based on similarity.

“Atsui” and “atatakai” show diversion, the synaesthetic feature, from tactile to auditory or visual in the process of meaning extension. However, “nurui” does not show diversion in the process of meaning extension although its meaning extends from “basic meaning”, the prototypical meaning of a word, to one “extended meaning”.

Key words : cognitive linguistics, meaning extension, atsui, atatakai, nurui

투 고 일 : 2022년 3월 29일

심 사 일 : 2022년 4월 15일

게재확정일 : 2022년 5월 5일